

犬糸状虫症

感染経路と性質

- 1、感染犬の血中にある犬糸状虫(フィラリア)子虫を蚊が吸血し、その子虫を蚊の体内で発育させた後に、他の犬を吸血すると同時にその感染子虫を身体に埋め込みます。フィラリア症を予防するということは、他の犬の健康を守ることもあります。

蚊の吸血、フィラリア子虫の蚊の体内での発育は、ともに平均気温が 15~20 を超えなければ起こりません。そのため、冬の時期や寒い時期の蚊には、フィラリアを感染させることは出来ません。ですから、冬の蚊、春先の早い時期の蚊は問題ありません。ただし、年間を通して温暖な地域や特殊な環境(植物園やビニールハウス、銭湯、クアハウスなど)では、注意が必要で、南の地域では一年中の投薬が必要です。

- 2、皮膚に侵入したフィラリア感染子虫は、皮下織、筋肉と部位を変えながら、2~3ヶ月かけて発育を行い、血管内へ寄生する準備を整えます。

フィラリア症予防とは、この期間内に(血管へ到達する前に)、皮膚や皮下織、筋肉内でその子虫を駆除する方法を取ります。ですから、「フィラリア“症”」を予防するのであって、「犬糸状虫」は駆除するのです。体調不良の際に投薬してしまったり、薬物の効果が足りない場合、一度の投薬では駆除しきれないことがあります。一ヶ月に一回という投薬間隔が開いてしまったり(投薬間隔の延長の間に血中へ子虫が移動してしまったり)、早い時期に投薬を止めてしまう(蚊がいなくても体内には感染子虫が残っています)と、簡単に感染してしまいます。

投薬期間は、春先に蚊を見かけてから一ヶ月以内から投薬を始め(寒い時期の蚊は安全、仮に感染しても一ヶ月以内なら間に合います)、蚊が見えなくなってから2~3ヶ月後まで投薬します(蚊がいなくても、体内に残ったフィラリアは生きています。また、最後に蚊に刺された時よりもあとに投薬しなければいけません)。一般的には、その地域や環境によって異なりますが、蚊の生息期間の延長、温暖化なども含めて考える必要があり、早いおうちでは(例えば、緑の多さなど)、4月、普通遅くとも5月から投薬を始め、12月末ないしは1月まで続けます。

- 3、血管内に移行した子虫は、さらに発育を繰り返しながら血行に従い全身・臓器をめぐり、心臓右心室に到達・寄生します。雌雄が揃った場合、マイクロフィリアを産出します。

このマイクロフィリアがさらに全身に移行し、各臓器に負荷をかけ、血液凝固系に異常をきたし、また他の動物への感染源となります。

検査

1、一年に一回、前回感染・投薬後3～6ヶ月後に行います。前年の投薬が不完全または実施していない場合は、2度行う必要があります。

早い時期での投薬は、無意味だけでなく、検査が不十分であり、副作用の発生やフィリア症を見逃がす結果となります。

2、検査の目的は、フィリア症の感染を正確に判断することです。予防薬は、フィリアが寄生している場合致命的な副作用が現れることがあり、投薬前に必ず検査をして、その危険を回避する必要があります。またすでにフィリア症に罹患してまっている場合、治療を早期に行うことで、治癒や合併症の予防・悪化を防ぐことが可能になります。

前年投薬が行われていても、効果不十分、服用し忘れ、服用しそこない(あとで吐き出していた等)、投薬間隔の開き過ぎ、体調不良時の投薬による効果不十分、不適切な投薬などがあれば寄生が考えられますので、投薬前に必ず検査が必要です。

3、血中のマイクロフィリアの検出:単性寄生、不適切な手技、寄生数が少ない場合、見落とすことがありこの方法は不十分です。

フィリア成虫抗原:現在最も信頼できる方法であるが、少数寄生、雄のみの寄生では検出出来ないことがあります。

誤解

1、一ヶ月に一回の投薬である為、投薬後一ヶ月効果が持続するのでは？

誤りです。投薬直後しか効果はありません。そのため、投薬後に生き残ったり、蚊に刺されたりして寄生した感染子虫は、再び発育を開始します。この子虫を駆除するのは、翌月の投薬です。一ヶ月分の寄生を、一回の投薬で駆除するのです。

2、投薬は年6回でよいのでは？

誤りです。今まで記述であった通り、投薬期間や回数は、あくまで蚊の生息期間に左右されます。ですから、九州などでは一年中、北国などでは(最近長くなっているということですが)数ヶ月で良いとされています。6回というのは、数十年前の習慣から残っている迷信です。

3、高層マンションに住んでいるから、外出しないから、洋服を着ているから、蚊取りマットをつけているから、毛が長いから、ウチノコハ大丈夫？

誤りです。そのような環境でも現実には感染は起こっています。人だって、いつのまにか刺されていますよね。

補足

1、ミ发育阻害薬(ノミの駆除・予防ではなく増やさないようにする薬)や 消化管内寄生虫駆除薬との合剤が発売されています。確かに、便利ではありますが、「念のため薬を飲んでおこう」という考え方は決して良いことではなく、当院ではこれらの薬を採用していません。なぜなら、

1) 一緒になっているから便利というのは人からみた言い分であって、本当に動物のからだのためによいことでしょうか？ 不必要な投薬は行わない、という絶対条件がある今の医学で、矛盾したものではないでしょうか。ミの寄生がひどい(適切な予防をしても不十分な)場合、消化管内寄生虫がいる(検査をして確認した)場合、この時のみの投薬で充分ですし、その方法が今でも推奨されています。

2) 合剤にした場合、若干ではありますが効果が下がります。

3) 特に、 について、以前はフィリア症予防薬とは一緒に服用しない方がよいと言われていた薬です。

4) ただし、消化管内寄生虫の濃厚な感染が考える地域では、合剤が必要になることもあります。というのが理由です。この点も理解された上でご希望される方は、申し出てください。

2、アメリカでは、スポットオンタイプ(ダニの治療などにも有効で、当院ではその治療に採用しています)、注射タイプ(一回の注射で一年間有効)もあります。効果は保証されていますが、その安全性や問題点など、まだ見ていく必要があるでしょう。